

『後撰集新抄』翻刻（八）

日向一雅

A Transcription of *Gosenshū Shinshō*(Ⅶ)

Gosenshū Shinshō, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kan-kōkai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67, 68, 70, 71, 72 and 76 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III, IV, V, VI, VII and VIII. For this issue I have transcribed volume IX

後撰集新抄恋 九 (外題)

後撰和歌集卷第九新抄

恋歌一

○恋と云て、男女の中のみの歌とする事は、古今集より始れり。万葉には、男女の相思ふ事のみならず、親子兄弟朋友の相思ふをよめるも、共に相聞と題して部を分てり。さて万葉よりはじめて、古今以後の撰集にも、恋の歌のことに多かるは、人の情の感する事、恋にまさるはなく、物のあはれのふかく、忍びがたきすぢは、殊に恋に多くして、神代より、世々の歌にも、其すぢをよめるが多きに合せて、心ふかくすぐれたるも、恋の歌に多ければなり。これらの説の委しき事は、古今集打聽、また源氏物語の玉の小櫛などを、よく見てさとるべし。(二五)

からうじてあひしりて侍ける人に、つゝむ事ありて、またあひがたく侍ければ

○からうじては、辛シツくしてなり。くを引といふは例の音便なり。辛シツ苦ク艱カン難ナンを為シてといふ意にて、俗に、難義ヲシテ、また、ヤウヤウノコトデ、などいふにちかし。

源宗于朝臣

五〇八

あづまぢのさやのなか山なかくにあひ見てのちぞわびしかりける

○初二ノ句は序なり。中々には、俗言に、ナマナカニ、また、ケツクニ、など云に近し。一首の意は、逢はざりし以前には、逢はざ物思ひもあらじと思ひしに、かへりてあひ見て後には、わびしさのまさりたる事よとなり。もとより甚く辛苦をして、たゞ逢はん事をのみ思ひつるに（二〇）、一度逢て後は、恋しさもまさり、さて二度あふ事の難ければ、いよく物思ひの多くなりたりといふなり。拾遺恋三「あひ見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり、後拾遺恋三「あひ見ての後こそ恋はまさりけれつれなき人を今はうらみじ、などをも引合せて心得べし。佐夜中山は、遠江国なれば、東路のといへり。古今恋二「東路のさやの中山なかく／＼に何しか人を思ひそめけん、など猶多し。和名抄に、遠江国、佐夜郡とあり。又、続紀に、養老六年、二月、割^テ遠江国佐益郡八郷^ヲ、始置^テ山名郡^トと見えたり。此佐益郡にある山なれば、さやの中山といへり。今世にて、さよの中山といふは、佐夜（夜）とも書けるを、夜（ヨ）と誤よみての事なり。六帖「東路のさやの中山さやかにも見ぬ人ゆゑに恋やわたらん。玉三集「たび人の草のまくらにおく太刀のさやのなかやま今朝やこえなん。などのつゞけは、さよといふべからぬを想ふべし。二二〇

しのびたりける人に、物語し侍けるを、人のさわがしくなり一本侍ければ、まかりかへりてつかはしける

貫之

五〇九

あかつきとにかいひけんわかるればよひもいとこそわびしかりけれ

○人に別る、わひしき時は、暁ぞといかていひたる事ぞ。暁のみにはあらず、人に別れだにすれば、宵にても、猶甚わびしきよとなり。又異本などの、暁をの方にては、古今恋三「有明のつれなく見えし別より暁ばかりうき物はなし、などの如く、暁といふ時刻は、憂き時ぞと咎めいひたる意なり。

源おほきが、かよひ侍けるを、後々はまからずなり侍にければ、となりのかべさしのあなより、おほきをはつかに見て、つかはしける二ツ
の又一本

○此詞書、おほきをはつかに見てとある、曰城といへるは、つたなければ除くべしと、つかね緒に見えたり。此作者、駿河といふ女は、宮仕人にて、其曹子の壁の穴より、隣の曹子などに居るを、見たるよしと聞ゆ。よの常の家ならんには、となりのさま、壁の穴などよりは、見ゆべくもあらず。又の一本には、となりの曹子の穴より、ともあればなり。又云さうしは障子にてもあるべし。

するが

五二〇

まどろまぬかべにも人を見つるかなまさしからなん春の夜の夢

○夢の異名を、かべといへば、彼穴より見たる、屋壁によせていへるなり。壁は夢の異名にはあれども、元来実の夢にてはあらぬゆゑに、「まどろまぬかべにも、といへる事、下哀傷に、「ねぬ夢にむかしのかべを三ツ見てしよりうつ、に物を悲しかりける、とあるに同じ。引合せ見て心得べし。一首の意は、常々恋しくのみ思ひ居れば、寝ざるをりの夢にも、思ふ人を見つる事かな。春の夜の夢は、必合ふものといひ伝へたれば、此今見たる春ノ夜の夢よ、正夢にてあれかし、と云て、今はかれがたになりたれど、立かへりて、又もとの如く、逢ふよしもがな、といふをふくめたるなり。夢を壁といふ説、又、春ノ夜の夢は、正夢といふ事の例などは、別記に委く出せり。

あひしりて侍ける人のもとに、返事見んとてつかはしける
かへりこと抄

元良みこ

五二

くや／＼とまつ夕ぐれと今はとてかへるあしたといづれまされるり異

○くや／＼とは、来るか／＼と、いはんが如し。今はとて云々は、今はもはや三三夜明たり。さらばとてかへ

る朝と、いふ意なり。待と別る、とは、いづれか悲しさはまされるぞとなり。此御歌など、末句一本家集などにまされり(和)とある方変

格にて、其方然るべき此みこ、此御歌を、人々によみかけ給ひて、かへり事見給へるよし、大和物語に見えて、よし、玉緒に見ゆ

他の集にも、返事見えたり。詞書を、つかね緒に、藤原かつみを、あひしりて侍けるに云々、とあるべき

よしいはれたるは、此集此にてはかなふさまなれど、こは猶もとのまゝにてあらん方、然るべくおほゆ。

しひていは、相しりて侍ける人々の許に、などはありもすべきか。それも猶あながちなる説なるべし。

返し

藤原かつみ

五三

夕ぐれはまつにもかゝるしら露のおくるあしたやきえははつらんしつべき 又一一本

○夕暮は、待にもかゝり居て、いさ、かは思ひまざる、方も侍れど、起四三別る、朝は、命も消果るに

てや侍らんとなり。松を待に云かけて、白露のは、おくといはん枕詞にて、かゝる消は、露の縁語なり。

蜻蛉日記、「よの中はまつにも露はかゝりけり明れば消る物をこそ思へ。此歌、詞のつゞきは、二ノ句よ

り三ノ句へつゞけども、意をは、二ノ句にて切て心得べし。待にもかゝるなり、といはんが如し。三ノ句白露のは、おくといふまで

へかゝりて、露のおくると云事はなればなり、後かくて、此同時の歌は、新拾遺三

元親親王、くや／＼とまつ夕ぐれと今はとてかへる朝といづれまされる、と云歌を、あまたの人の許に遣

して、返事見けるに、本院侍従、「夕ぐれは頼む心になぐさめつ明るあしたは消ぬべき物を、と見えたり。

榮花物語の、初花巻にも、此事を費て、此侍従が歌の事を、これはあるか中に、おかしくおぼされけると、昔の事をいひ出つ、云々、と見えたり。(四二)

やまとに、あひしりて侍ける人の許に、遣しける。

よみ人しらず

五三

うちかへし君ぞ恋しきやまとなるふるのわさ田のおもひ出つ、

○此歌、さしも心得がたき歌にはあらねど、猶或人の考などもありて、いさ、か思ひ迷ひつるを、正明の、此歌は、三四一五二とつゝきて、三四ノ句は、序ながら、大和に居る人の許へやる歌なる故に、有心の序なり。初句は、一たび中絶たる人を、又恋しく思ふ事なりといへり。かかれば、大和なる布留のわさ田の打かへし思ひ出つ、君ぞ恋しき、と心得べきなり。初句は、立帰りなどいはんが如し。一度中絶たる人を、今又をり／＼思ひ出るよしなり。布留は、大和の地名なる事、上春に委しくいへり。末句は、思ひ出に、ヒナキ秀をかけたなり。秀は即穂出(五オ)の義なり。

かへし

五四

秋の田のいねてふ事をかけしかば思ひいづるがうれしげもなし

○此贈答、いづれか男、いづれか女と、さだかにはしりがたけれど、まづは、大和なる方、女とおほしきなり。さて、此女さるべき事ありて、大和へ行んとするを、男のしひてもとゞめず。然らば往ね、とやうにいひたるが、日ごろありて、此かけ歌をやりたるなるべし。さる故に、返事にかく恨おこせたりと見ゆ。一首の意は、君は我を厭給ひて、往ねといふ事をたまひけり。一度往といふ事を口へ出してのたまひたれば、今さらに又思ひ出給ふとも、うれしかるべきさまには思はれ侍らずとなり。稲を往にそへたるは論なし。往は往けといふ事也。かけも稲の縁の語なり。古今五恋「秋の田のいねてふ事もかけ(五ウ)なくに

五五

君

人恋る心ばかりはそれながら我はわれにもあらぬなりけり。

ころかな 一本又一本

女につかはしける

何をうしとか人のかるらん。正明云、こは大和の人、女なる事論なし。是は、かれがたになりたる女の、大和へ往侍りといひおこせたるなり。さらばとめもするかと思ひてなり。其時は、行給へと云て、後に此歌をよみておこせたる故に、思ひ出てもうれしくもなしとなり。かけ歌のふるのわさ田は、うちかへしといはん料のみ。此歌の、秋の田のは、いねといはん料のみなりといへり。

○そなたを恋しく思ふ心のみは、もとの我心にて、其他の事は、我にもあらず、現心もなくなりたるよ、となり。続後拾遺恋「誰ために君をこふらん恋わびてわれは我にもあらずなりゆく。(六オ)

まかるところしらせず。侍けるころ、又あひしりて侍けるをとこの許より、日ごろたつねわびて、うせにたる。となんおもひつるといへりければ

るに 又一本

○此詞書、家集には、そこもしらせで、外にわたりけるをりに、男の、かくれにたるとなん思ひつると、いひたりければ、かへし」とあり。然れば、此集の詞書に、うせにたるとなん、とあるも、

隠れたる意ならんか。帯木巻、夕顔上君の、外へ隠れたる事跡もなくこそ、かきけちてうせにしか、とある

も、同じければなり。然れども又、歌の末句にて見れば、死たりと、いふ意の方ならんか。此男

といふは、仲平公なれば、此集に、「又あひしりて侍ける男とあるは、他の男のやうにも聞ゆれども、然死た(六六)りと思ひ

つるなども、いひやり給ふべき中と思はるればなり。うせにたりと、あるべき格の詞なるを、たる

と、あるは、変格にて、うせにたるよと思ひし、といふほどの語勢なり。此類、詞書には多くあり。
 上秋下六に「人の、かりは来にけると申を聞て」とある所にいへるをも、見合せてさとるべし。

いせ

五六

思ひ川たえず流る、水のあわのうたがた人にあはできえめや

○失にたるよと思ひつるとは、なさけなくものたまふものかな。いささかゆゑありて、かく外へうつりては居侍れど、心には絶ずおもひ続けて、消るやうに思ひ侍れど、さやうに、失にたると思ひしなど、のたまふやうなる、危イナゲ気の発ツチ起か、りておはする、あだ人に、今一度逢モまで、恨をいはぬうちには、いかでか消侍らん。いかな事く、消は侍らず、といふなるべし。思ひ川は、筑前といへり。たえず流る、は、流るゝをかねたるは、思ひの絶る事なきを、水のたえざるによせたるなり。うたがたは、万葉に、宇多我多、宇多賀多、なども書たれば、か文字を濁るべきなり。水の沫ウツのうたがたとあるは、和名抄に、沫雨、淮南子注云、沫雨、雨ハ二ツチ激上ニ、沫起ムソトシ。若ニ覆盆フクヒ。和名、宇と見えて、水上に浮く、沫ウツの事をいふより、かくつゞけたる歌多し。縣居翁も、うたがたは、しばしてふ心なり。よりて、しばしも人に、といふつ、けなれば、この人を、にこるはわろし。小大君集に、うたがた花をともしへるにてしるべし。かつうたがたは、にはたづみなどのうへにうく、大なるあわをいふ。万葉などに多き詞なり、といはれたり。然れども、これらもいまだ、此詞の正しきモト意にはあらず、うたがたといふ詞の方、もとにて、覆盆をいふは、未なるべく思はる、なり。よりて此詞は、たゞ危イナゲ気の発ツチ起か、ると云意とせん方、近きさまなり。此詞の事、甕麻呂委ミ考あり。事長ければ、別記に載せたり。故に此所には、詞の例などをも出さず。

題しらず

三統公忠

五七

思ひやる心はつねにかよへどもあふ坂の関はこえずもあるかなばかり一本

○あふさかのせき越えずとは、思ふ人に逢はざる事なり。一首の意、かくれたる所なし。

女につかはしける

よみ人しらず

五八

消はて、やみぬばかりか年をへて君を思ひのしるしなけれは

○いつを待ても、君を思ふ思火のしるしもなく、しばくもえ逢はねば（八オ）我身は終まに、いたづらに消果て、止むやのみにてあらんか。いともく悲しき事なるかな、となるべし。消果てとは、思ひに消入て、身の無くなるやうの事を、火の縁にていへるなり。二の句の文字は、疑ひて切る、意のてにをはなり。かなの意にはあらず。

かへし

五九

思ひだにしるしなしてふ我身こそ抄か異にぞあはぬなげきの数れ抄はもえける

○思ひだにも、しるしのなしとのたまふが、さやうにいはる、我身には、其しばく本意の如くもえ逢はぬ、なげきの数は燃もて、甚苦しき事にて侍るよ、となり。思火といふより、なげ木の数はといへるなり。四の句、あかぬとある本は、誤なるべし。

題しらず（八ウ）

三〇

ほしがてにぬれぬべきかなから衣かわくたものよ、になければ

○ほしがてには、難^ガレ令^シ干^キになり。常々泣く涙にて、袂の乾く間なければかくては、袂ばかりにはあらず、此唐衣の、何所もく、一向に濡わたりて、干しがたく、ぬれ通るにてありぬべき事かな、といふなるべし。初二ノ句は、衣の全体の、濡ぬべきかなといふ意なるべし。袂よりして、全体へ及ぶべし、といふなるべし。二ノ句、一本に、くちぬべきかなとあるにては、袂の濡々して、終には、くちぬべきかな、といふ意となるなり。此方、まさりげには思はる、なり。末句、よ、になければの、よは、よと、もに、などのよにて、常といふ義なり。常々乾く間の無ければといふなり。かくて此よ、の詞は、涙を流して泣くさまを、よよとなくといふ、此よ、の詞を兼たるなり。よりにて歌の表の方にて(九ま)は、常々に無ければ、裏にては、よ、に泣ればといふなり。よ、となくといひたるは、六帖四、「君によりよ、くくくとよ、くと音をのみぞなくよ、くく」と。また夕顔巻、夕顔上君の、俄に身まかれるを、源氏君の見奉る人もいとかなしくて、おのれもよ、となきぬ、など猶これかれに見えたり。

三二

よと、もにあふくま川の遠ければそこなるかけを見ぬそわびしき

○彼方と此方とを、た、かはせたる為立なるべし。いと近く、其処なる人なれども、逢ふ事の希ければ、常々影をも見ぬがわびしき事よ、といふなるべし。其処を、川水の底にそへて、影を云々といへるは、もとよりなり。阿武隈川は、陸奥なり。中務集、「かくしつ、世をやつくさんみちのくのあふくま川をいかでわたらん。縣居翁云、あふく(五ウ)ま川は、もとみちのくにの、あぶくまでふ所の川なり。されど後世人、あうのごとくよみきたれば、しばしき、よきにまかせてもありぬべし、といはれたり。

五三

わがごとくあひ思ふ人のなき時は深きこゝろもかひなかりけり

○意明らかなり

五三

いつしかとわがまつ山に今はとてこゆなる波にぬる、袖こころかな又一本

の異 ○松山を波の越ゆとは、古今廿葉歌「君をおきてあだし心を我もたば末の松山波もこえなん」とあるを本にて、

契を違ふる事にいへり。一首の意は、いつかくと、逢ふ事を我が待つ間に、人の心のかはりたれば、それをうらめしく悲しく思ひて、袖のぬる、事かな、となり。今はとては、俗言にいへば、モウイヤヂヤトテ、と云に近し。此歌統千十才載五恋に、「物申ける女、こと人にももの申よし聞て遣しける、兵部卿元良親王、とあり。但し、人を待と云は、女の歌なり。元良親王とある方は、誤なるべしと。正明はいへり。

五四

人ごとはまことなりけり下ひものどけぬにしるき心とおもへば

女の許につかはしける

○世上にていふ事は実なるよ。世の諺に、人に恋らるゝものは、下紐の解ると云事のあるにて、思ひ合はするに、我を君の恋給はゞ、必我が下紐のとくるにてあるべけれど、さらに解けぬにて、君の恋給はぬ心はしられたりとなり。猶次の歌をも見合せて心得べし。さて人ごと、は、此歌にては、世上にていひならはしたる言、といふ意と聞えたり。諺にいへる事をさしていへればなり。但し、かくざまに、昔よりいひ来れる諺などをさしていへる例は、外にはいまだ見あたら十才ず。万葉四、人ごをしげみこちたみあはざりき心あることと思ひわぎも、又この世には人ごとしげしこん世へるとは、いさゝか異なる道ひざまなり。人に恋らるゝものは、下紐の解るといふ諺は、万葉十一、「うるはしとおも

へりけらし忘るなと結びし紐のとくらく解るなり思へば、同十二、「草枕たびの衣の紐とけぬおもほせるかも此年ごろは、「くさ枕旅のひもとく家のいもしあをまちかねてなげかすらしも、など猶多く見えたり。

五五

むすびおきし我した紐のいま、でにとけぬは人のこひぬなりけり

○一首の意は、上の歌と合せ見て明らかなり。思ふに、これも同じ人の同時オチシヨウの歌にて、二首並ぶべくは、此歌の方先にて、「人ことは云々の方後なるべし。

女のもとに遣しける抄

女の人のもとにつかはしける 千一七

五六

ほかの瀬はふかくなるらし飛鳥川りけり一本きのふの淵ぞ我身なりける

○古今下雜「世中は何か常なるあすか川きのふの淵そけふは瀬になる、とあるをもとにて、明日香川の淵瀬の変やすきを、世中の事にも、男女の間にも、たとへていへるなり。一首の意は、他オカの方に深くなる所あるなるべし。さやうに思はれて、我方は、きのふの淵にて浅くなりたるよとなり。大和物語、「世の中のあさき瀬にのみなりゆけば明日アスのふちの花とこそ見れ。こは女の歌にて、男の、他女コメにすみつきたる事を恨てやりたるなるべし。返しの意もしか聞えたり。正明云、そのかみ、男は、女を幾人も持て、こゝかしこへ通ふ中に、心に叶ひたる女の許に、居つくなり。それをすみつくといふ。これ本妻なり。さる故に、昔の女は、夫のあまたの女に通ふ事はいとはねども、其中にナニすみつく所やあらんと、それを憂ふる事なり。此歌、一二ノ句は、外に通ふ女のある、それに心が深くなるさまなりと云事、下ノ句は、我には浅くなりたりといふ事にて、即他女オカメの許にすみつくにやと、心をいたむるおもぶきなり。然れば、抄本

の詞書は、歌にかなはず、女の人の許に云々とある本によるべしといへり。

返し

五七

ふちせともいさやしら波たちさわぐ我身ひとつはよる方もなし

○何方を深しとも浅しともしらず、其方などにも、さやうに腹をたち、うとまれて、今は我身のより所もなしとなり。

題しらず

五六

光まつ露にこゝろをおける身は消かへりつ、世をぞうらむる

○光まつとは、月の光にもあれ、日の光にもあれ、露の光は、外より来る光を待受るものなれば、月光などの無ければ、夜の露の、有るか無きかしられぬが如く、思ふ人の来らざれば、我が思ひのほどもしられざるにたとへて、光を待とる露と云が、君の来り給はん事を待つ我身はと云意なるべし。露に心をおけるとは、露の光を待得ん事を、願ひ欲して、其事にのみ心をおく身はと云意なり。古今に、「立かへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波、とあるなども、人に心を置く事にて、其人の許へ、我心を常に遣りて、離れざる意なり。一首の意は、露が、月光などの来て、照さん事を待つ如くに、君の来給はん事をのみ、常々忘れずに思ふ。我が露の身は、久しく来給はぬ夜がれ中絶につきて、身も消かへり、あるかなきかになりて、世をうらむなげき、物思ひをし侍りといふなるべし。昔家万葉集上、「光俟えたにか、れる雪をこそ冬の花とはいふべかりけれ。新古今下「光まつ枝にか、れる露の命きえはてねとや春のつれ

なき。世とは、例の男女の間をさしていふなり。又、正明は初句光まつは、日影まつの誤なるべし。日影まつとは、「風をまつこと君をこそまでといへる待にて、日影さしのほればやかて消る事なり。心をおくとは、あぶなく思ふ事にて、人の心がおもふか思はぬかしれすして、おちつきのなきことなり。おくといふ詞、古今のとは異なりといへり。此歌、抄には、威光ある人を、待人に心をかけて、数ならぬ身の歎の歌なり。露は日を待て消ればなり、とあれども、こは非なるべし。

ある所にあふみといひける人のもとに遣しける (十三三)

貫之

三五 しほみたぬうみときけばやよと、もにみるめなくして年の経ぬらん

○女の名を近江といふにつきて、其近江の湖は、潮の満干なしときく。さればにや、海松和布は生ざるなり。そなたの名も、彼湖のある所と同じければ、いつまでも、かやうに逢見る事のなくて、年を経るにやあらんとなり。上ノ句は、みるめなくしてといはん料のみなり。六帖、「近けれどあふみのうみぞか、りてふみるめもおひぬなかやなになり。

あつよしのみこ。、まうできたりけれど、あはずしてかへして、又のあしたにつかはしける

桂のみこ (十三三)

三〇

から衣きてかへりにしさよすからあはれと思ふを恨むらんはた
○唐衣は、枕詞なり。来給ひつるを、え逢ひ奉らずして、いたづらに帰リ給ひたる、其夜すがら、我は、

あはれくと思ひ明し侍るを、君は又、我をつらしなど恨給ふらんかし、となり。さ夜すがらは、終夜とヨミカヲいふに同じ。はたは、其時にさしあたりての事をいふ詞なり。異本に、末の御句、またとあれども、さては、一首の御歌がまおとるべし。はたと云詞の事は、上秋上に、委くいへるを引合せ見て心得べし。

あひまちけるひとの、ひさしうせうそこなかりければ、。つかはしける

侍り一本又ノ一本
※つかね緒云、相侍けるに、平定文、久しく
うせうそこせざりければ、つかはしける

いひ 又ノ一本

きのめのと

五三

影だにも見えずなりぬる一本ゆくり山の井はあさきより又水やたえにし十四オ

○浅きながらも、山の井にし 又ノ一本に水のありし程は、影も見えけれども、今は、其影だにも見えずなりゆくりは、次

第々々に水の絶たるにや、と云て、君も、浅き御心ながらも、影を見せ給ふをりもありしかども、今は、影だにも見せ給はぬやうになりゆくりは、浅き御心より引つゞきて、一向に、浅き御心までも、なくなり給ひしにや、といふなり。万葉十六、「安積山かげさへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに、とあるを本歌にていへるなるべし。

かへし

平定文

五三

あさしてふ事をゆ、しみ山の井はほりしにかと異ごりに影は見えぬぞ

○山の井は、浅きくといはる、事が、いまはしさに、深くせんとて、堀し故に、水が濁りて、それゆゑ

に影は見えぬなるぞ。水の絶たりなど云十四。事にてはあらずとなり。此歌などは、たゞ山の井の浅しといふ詞のうへにつきてこたへたるのみにて、ほりしにこりになどいふを、我心を深くせんとてと云やうにそへていへるなどにはあらざるべし。俗にいはい、まけをしみに、しひて、言葉の上のみにて、いひわけをしたるに似たり。こは戯の心ばへもあるべし。ゆ、しは、もと神に仕へ奉るなどに、穢物キチキチなどを忌避イハクるをいふ。齋ユ々し、などよりうつりて、俗に、いまはし、いま忌々し、又、いやらし、などいふ意に用ひたる事多し。信明集に、「たなはたの契けん日は過すともたとふべしやはこともゆ、しく、返し、「ゆ、しくも思はざりけりたなはたは忘れぬ中のあらまほしさに、などある皆同じ。

題しらず

よみ人も抄一本同しらず

五三

いくたびかいく田の浦に立かへる波に我身をうちぬらすらむ十五

○初二ノ句は、いくたの浦のいくたびか、といはんが如し。幾度かの言にひかれて、生田を出したるなるべし。さて、立かへる波になどいはん料とせるなり。しばく行ても、思ふやうに、心とけてもえ逢はずにのみ立かへりて、いく度か、かく我身をぬらす事ならん、となり。生田浦は、津国なるべし。生田川、生田杜、生田池、など皆摂津国なればなり。六帖又、末本には、「播磨なる生田の浦に云々、とよみたるもあるは、浦は広きものにて、隣国までも及ぶ物なれば、播磨の方にてても、生田ともいへるなるべし。

かへし

五四

たちかへりぬれてはひぬるしほなればや一本生田の浦のさがとこそ見れ

○幾たびか涙にぬる、とのたまへども、それは生田浦の潮の如くに十五、干る時もありて、濡てのみ居

給ふにもあらねば、ぬる、くくと、ことくしげにのたまへども、それは然あるべき、あたりまへと思ひ侍る、となり。猶いは、心とけたる逢事のなさに、袖をぬらすとのたまへども、それは、君のあだくしき御心ゆゑぞかし。されば、さやうに袖をぬらし給ふは、御心からの事にてあだ人のあたりまへぞ、といふ程の事なるべし。

女のもとに

五三

あふ事はいとゞ雲のの大空にたつ名のみしてやみぬばかりかぞ一本

○名のたつにさはりて、逢事は弥以て、雲のの如く遠くなりゆきたり。かくては、世の中に名の立たるばかりを本意として、末をは遂ゆず、逢事までをは思はずに、止め給ふ心にか。それはなげかはしく、悲しき(十六才)事よ、といふなり。末句は、名の立たるのみにて、これ限ぎにて止め給ふ心にか、といふ意にて、伊勢物語、「袖ぬれてあまのかりほすわたつみのみるをあふにてやまむとやする、とある、此やまむとやする、と云詞に同じ心ばへなり。

返し

五三

よそながらやまむともせずあふ事は今こそ雲のたえ間なるらめ

○今こそは雲の絶間の如く、逢事もしばらく絶てあれ、此通りにて、よそくしまゝにて、止+まんとする事にも侍らず。猶心長く、時節を待給へ、といふなり。初句は、かけ歌の、いとゞ雲井のといふをうけて、よそながら、とはいへるなり。

又ノ一本ナシ
又をどこ

又ノ一本ナシ
をどこ 十六六ウ

吾七

いまのみとたのむなれどもしら雲のたえ間はいつかあらんとすらん

○今こそ雲の絶間とのたまへば、実に然もあらんかと、たのむにてはあれども、又思へば、此遠々しきま、にて、終には絶果るにてあるべく思はる、なり。もしいよく、此ま、にて絶果なば、別段に絶間と云べきものは、いつ又あらんとするにか、といふなるべし。絶間とは、もと続きたる物の中絶たる事なり。然るを、今中絶て居るま、にて絶果なば、終に中絶といふべきものはなかるべし、といふ意と聞ゆ。又思ふに、下恋四に、「ながめしてもりもわびぬる人目かないつか雲間はあらんとすらん、とあるなどの類にて、絶間はいつか云々とは、逢ふべきよき間は、いつあらんとする事ぞ、といふならんかとも思へども、さては、かけ歌にも、上ノ句にも、少し合はぬやうなり。又或(千七)人(は)、たえまはいつかは、いつも(の)誤にはあらじかといへり。

かへし

又ノ一本
をむな

吾六

をやみせず雨さへふれば沢水のまさるらむともおもほゆるかな

○白雲の絶間はいつかといひたるをとりなほして、雨雲の事として、此方にては、雲の絶間のなき如くに、常々思ひつめて居て、涙さへ間なく流せば、君の恋しさも、雨降て沢水のまさる如くに、まさり給ふにてあらんと思はる、事かな、となるべし。古今恋三、「まこもかる淀の沢水雨ふれば常よりことにまさるわが恋。又一説、上ノ句は序(沢水の如)の意にて、まさるらんとも以下、歌の意にもあらんか。師翁云、二ノ句ふればは、ふらばの写誤にはあらじか。然らば、間断なく恋したひ給は、思ひのまさる事あらん、といふならんか

といはれたり。此（十七）贈答、此歌に置いて、先の人をたすけていへるなり。猶思ふに、初二句は、かけ歌によりていへるにはあれども、此歌をよむをりに、雨の降たるにもあるべし。

題しらず

よみ人も
又ノ一本

五三

夢を興にだに見ることぞなき年をへて心のどかにぬる夜なければ

○一首の意明らかなり。初句は、にの方まさるべし。

五四

見そめずてあらましものをから衣たつ名のみしてきるよなき哉

○初より、逢見そめずしてあるべき事なりしものを、名のみ立て、我身に馴る、時のなき事かな。さてもく、といふ意なり。きるよは、あひ馴る、時、といはんが如し。そめたつきるなど、衣の縁にてしたてたる事は論なし。下恋六、「我たちて着るこそうけれ夏衣大かたとの十八きみ見べきうすさを。玉葉恋一、「ぬぎすてんかたなき物はから衣たちとたちぬる名にこそありけれ。初句、異本にずしてとあるは、そめずしてとありて、見の字はなかりしを、ずしてとある所のみを、写伝へたるなるべし。もし然らば、此方もすてがたし。末句、きるよなけれど、ある本もあれど、そはよろしからず。

女のもとにつかはしける

五五

かれはつる花の心はつらからで時すぎにける身をぞうらむる

○抄に、人の我にかれ果るも、我時過し故なれば、かる、人より、身を恨むとなり、とあるが如し。

正明云、
詞書

女の許にを、別の許にとある本はなきか。此歌女の歌なり。女は容色を以て人に愛せらる、もの故に、時過にける身をぞ恨むるといふ事聞ゆ。男にては、わけもなき事なりといへり。

返し (十八ウ)

五三

あだにこそちると見るらめ君に皆うつろひにたる花の心け抄一本同を

○我心は、いたづらに外へ散るとこそ見給ふらめ。我心は、皆君にのみうつり果たるにてあるものをとたり。正明云、これ男の歌にて、一二句は、外心ありと見給ふらめともいふ事、三句以下は、我が思ひは、君にのみこりかたまりであるものと云にて、女の時過しといふをなくさむるなりといへり。げに詞書と合せては、男と女との違ひあるやうなり。

そのほどにかへりらんといひてこんとて、ものにまかりけるひとの、ほどをこ一本すぐしてござりければ、つかはしける

○其程には、いつ頃と月日をさしていへるなり。其いひおきたる日頃を過して帰らざりしかば、此歌をやりたりとなり。物にまかりけるとあれば、何所へとはしられされども、歌によるに、信濃の任国などに行たるなるべし。(十九オ)

五四

こんといひし月日を過すをばすての山のはつらき物にぞ有ける

○山の端は、空行く月日の、通り過る所なるを、月次日次の数をくらし過す意にいひかけたるなり。下恋五に、「数ならぬ身は山のはにあらねども多くの月を過しつるかな、とあるをも見合すべし。一首の意は、契おきたる月頃日ごろを過す所は、我がためにつらき物ぞ、といひて、実は、帰らぬ人をつらしと恨る意なり。をばすてのといふに、我を見捨て、といふ意をふくめたるにもあるべし。此歌は、女の歌なる事、詞書のさまにてしらるればなり。又、師翁は、こは男より年たけたる女にて、我身を老たるさまにいひなして、祖母オバを捨る意などにきかせたるにもあらんか。「我心なぐさめかねつ云々の意もこもるべし、といは

れたり。をばすて山は、信濃国更級郡なり。古今雑（十九）「我心なくさめかねつさらしなやをば捨山にてる月を見て。さて、山の名を、ば捨といふ事の説は、たしかなる事知がたし。打聴に、いにしへ、此山に姨アハレを捨たると云事を云ならはしたるより歌にもよめり。山川の名には、いとあやしきが多し。それに由来を云は、皆附会せたる作りごとなり。大和物語にも、此山に姨をすておきて、甥がよめると云歌あるは、此歌古歌をとりて、つたなき作物語なり。それにつきて云説共は、とるにたらず、とありて、頭書にも、令の集解に、信濃の俗、老人を山にすつる事有よしあれども、事跡たしかなる事にもあらず。諺をのせられしなり、とあり。古今集頭注には、或書を引て、此山、はじめは冠山といへり。冠の巾子のやうに似たるとかや、と見えたり。か、れば、仮字も、速をはかおはか定めがたけれど、今は、しば三十らく多く書来れるによりて、をはとは書たり。されど、此歌師翁の説の如く、祖母捨の意にいへるならんには、おばと書べきなり。

かへし

五四

月日をもかぞへけるかな君こふる数をもしらぬ我身なになりなりけり異

○君は、月日の数をもわきまへ知居て、数へ給ふ事かな。我は又、君を恋ふる、思ひの数々は、限りもなく多きゆゑに、月日をかぞへどころにてはなく、君を恋ふる、其数をもしらぬ身なる事よ、といふ意なり。恋ふる数と云は、思ひの数、なげきの数、など云と同じさまの詞にて、間もなく、恋ふるよしなり。さて、君こふる数をもしらぬ云々と云に、思ひほれて、現うつし心もなきさまの意こもれり。月日をもと云て、数をもといへる、二つのをもの辞、よく味ひ見るべし。三十

女に、としをへて、心ざしあるよしをのたまひわたりける。を抄一本同女、なほことしをだに待くらせと、たのめけるをそのとしもくれて、あくる春まで、なほ一本いとつれなく侍ければにつかね緒

○のたまひわたりは、いひわたりといふに同じくて、初めいひそめたるより、年月経ても、たゆみなくいひ居る事なり。一本に、のたまひわたりけるを、をもじあれど、猶、ににてよろしく、さて、女といふ事は、除くべきよし、つかね緒に見えたり。

五五

このめはる春の山田荒六帖を打かへし思ひやみにし人ぞ恋しき

○此歌、意はこともなく聞えけれど、四ノ句、思ひやみにしと云事、詞書にかなはぬさまなり。三句までは、思ひやみにしといはん料にいへるなれば、此句ぞ一首の魂にはある。抄には、今年をだにまちくらせといひし時、春はあふべしと思ひて、しばし二十一お思ひの休やすまりしに、春も猶つれなければ、思ひやみにし人を、打返し又恋ふるとなり。このめはる春の山田をは、うちかへしの枕詞なり、とあり。此意ならんか。されども、一年の間を待たる事を、思ひ休むとはいふべくも思はれず。やむとは、止とまる方とこそ聞ゆれ。此歌、拾遺三には、題しらず、よみ人しらず、「あづさ三春の荒田をうちかへし云々とあり。かくては、思ひ止やむべき事ありて止やたるが、又立かへりていひやりたるなるべし。

心ざし。は異ありながら、えあはず侍ける女の許に、遣しける

はへり、又一本
※つかね緒云、いせが許につかはしける。

贈太政大臣

五五

ころをへてあひ見ぬ時は白玉のなみだも春は色秋まさりかはり伊勢集

五七

人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

○こなたも久しく逢はずして君を恋ふる涙は、春になりて、氷などもとけて、水の流る、やうに流出侍るよ。これは常々不絶おもひと云火のわかすにて侍るべしといふにて、涙のぬるむとは、袖にもつ、(二二二)みあへぬやうに流出るを、氷の解けたる意にいへるなるべし。上春に、「白玉をつ、む袖のみ流る、は春は涙もさえぬなりけり、とあるなどに同しさまのいひなしとおほしきなり。此歌家集にては、「人のつら

かへし

伊勢

○此歌、伊勢家集には、心ざし有ながら、えあはざりける頃、おこせて侍(二二二)ける。おこせては、男ノ許ヨリ也。仲平公ノ事ナルベク。「ころをへてあひ見ぬ時は白玉の涙も春は色かはりけり。かへし、「くれなるに涙うつるとき、しをはなどいつはり和我思ひけん、とありて、又返歌あり。此家集と引合せて見るに、一首の意は、春は雪も消、氷もとけ、草木も萌(モエ)などして、物の改まる時なれば、我が久しく逢はぬをなげく、涙の白玉も改まりて、紅になりたるよな、といふなるべし。春、草木などの色のまさるは、古今「ときはなる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり、などの如く、緑の色のまさるをいひ、涙の色は、白きが紅になる事にて、異なれども、色のまさるといふ詞は同じければ、かくもいへるなるべし。但し家集に、「秋は色かはりけり、とある方は、いとよく心得らるるなり。秋は木草の葉のみづる頃なれば、それになぞらへて、白き(二二二)とある涙の色も紅葉に変わりたりと、いふなればなり。かくて、家集に色かはりとあるにて見れば、此集のまさりは写誤にや。かはり人といふは、まづはよからぬ事なり。広く見わたして後には、思ひの外なる事も多くあるものなるを、己が学のたらはて心得がたければ、写誤ならんなどはんは、古書を深く尊重する心のなきなり。古への書に事にも異なる伝へは多かるものなれば、これもかれもともにすつべきにはあらずかし。されど又版名書には、ことに写誤も多き物なるを、よく考ふる事もせでうち見たるまゝに、しひたる解をまをし、或はなほだりに見て過人も又学の道の本意にはあらず。かにもかくにも古書をば深く学び重みして、物すべき事をば忘るまじき事なりかし。

くなるころ」と詞書ありて、別の時の歌の如く見えたれども、此集にては、かなたより春は涙の色のま
さるといひたるをうけて、こなたは春は涙のぬるむといへるは、返歌と見てよくかなへるさまなり。又云
涙のぬるむとは、アツカ温になりて流る、事にて、俗に熱イ涙ガコボル、と云に同じ心ばへにて、アツ熱からんと
する涙の意なるべしと、正明薨麻呂などはいへり。

男のこ、かしこにかよひすむところおほくて、つねにしもとはざりければ、女もまた、色このみなる名
たちけるを、うらみはべりつかはせり 又の一本ける返事に

※つかね緒云、あつよしのみこの、こ、かしこに通ひすむ所多くて、常にしもとはざりけるを、みづからも又色このみなる名たちけるを、みこのうらみ侍けるかへり事に

源たのむがむすめ

孟

つらしともいかがうらみむ時鳥我宿ちかくなく声はせで

○抄に我をつらしともいがかで恨給はん、君も我宿近くおとづれはし給はでとなりと、あるが如し。

かへし

あつよしのみこ

孟

里ごとに鳴こそわたれほと、ぎすすみかさだめぬ君たづぬとて

○抄に、我がこ、かしこにゆきわたるは、そなたの栖定給はぬを尋んとてぞとの心を、子規よせてなり
とあるが如し。かくて、四ノ御句すみか定ぬは、御歌の表の方にては住所スミカの意、裏の方にてはかよひすむ
男の多く、いづれをそれとも不定意サダメイヌにのたまへるなり。詞書にニ十三色このみなる名たちとあるを、む
かへ見てさるとるべし。正明云、此ころ女のみこにはつげずして、家かへたる事あるによりて、すみか定め

ぬとよみ給へるなるべしといへり。かく見れば御歌の表の方もことに穩に聞ゆるさまなり。

えがたかるべき女を、思ひかけて遣しける

○えがたかるべきは、得る事のかたきさまなる意なり。我より貴き人などなるべし。歌の意しか聞ゆるなり。

春道つらき

玉

数ならぬみ山がくれの子規人しれぬ音をなきつゝぞふる

○抄に、数ならぬ身とそへたり。身を卑下してえもいひ出ず、なきつゝふる心なるべしとあるが如し。人しれぬとは、我が思ふ人に知らぬをいふなり。拾遺雜「年を経てみ山がくれのほとゝぎすきく人もなき音をのみぞなく。

いとしのびたる女にあひかたらひて後、人めにつゝみて、又あひがたく侍ければ

これたゞのみこ

玉

あふ事のかた糸ぞとはしりながら玉の緒ばかりなに、よりけん

○片糸は、より合はせぬ糸をいふなり。万葉十一、「かた糸もてぬきたる玉の緒をよわみみだれやしなん人のしるべく、古今恋二「片いとをこなたかなたによりかけてあはずはなにを玉緒にせん、なども見えたり。されど此御歌にては、逢事の難きといふ意にのみいひかけ給へるにて、よわきことまでにのたまへるにはあらず。玉緒は、玉（二十四）を貫き、連ぬる緒の事にて、長き事にも玉緒の長き、短き事にも、古今恋二

五三

「しぬる命いきもやするとこ、ろみに玉の緒ばかりあはむといはなん、同悉三「あふ事は玉の緒ばかり名のたつは吉野の川の滝つ瀬のごと、などもいへり。今は短き意にのたまへるなり。何によりけんは、なにしに逢ひそめけん、と云意なるを、糸をより合ははする事にのたまへるなり。詩経召南に、其釣維何、維絲維緝、とある朱宮の註に、緝、編也、絲之合而為緝。望二男女之合而為緝也。とある事なり。一首の御意は、もとより、逢事は難き人ぞと知つ、思ひかけて、何しにはつかには逢初たる事ぞ。中々なる物思ひの種となりけるものをとなり。

女のもとより、わすれぐさにふみをつけて、おこせて侍ければ

よみ人しらず (二十五オ)

思ふも一本とはいふ物からにともすれは忘る、草の花にそ有ける 又ノ一本やはあらぬ

○常ツネに思ふくとはのたまふ物ながら、や、ともすれば、忘る、そなたにはあらずや。そなたの心は即此花の名の通りと、思はるとなり。ともすればと云詞は、とすればか、り、古今詩譜歌、「そへにととすなごのれはか、りかくすれば云々、すればに、もの入たるにはあれども、俗言に訳してはドウカスレバ、ヤ、トモスレバ、チヨットトモスレバ、などいふに近し。下此、「ともすれば玉にくらべしますか、み人のたからと見るぞ悲しき、拾遺春、「ともすれば風のよるにぞ青柳の糸はなかく乱そめける、小大君集、「草の葉にあらぬよなれどもすれば露は我身の上かとぞ見る、六帖、「秋の野は道もゆかれずともすれば花のあたりに目のみとまりて、又竹取物語に、或人の月の顔見るは、いむ事とせいし二十五ウけれども、ともすれば人まにも月を見ていみしくなき給ふ、など猶源氏物語などにも、多く見えたる詞なり。此詞俗言に、悪(ワル)クスレバといふは、いと近けれども、猶異なり。物語などによくせされはよくせずは、なといへる

詞正しく、悪クスレバ、悪クシタラハ、なといふに当れり。よく広く見わたしてさとするべし。

かへし

たいふのごといふ人 いひける人 異

吾

うゑて見る我はわすれであだ人にまづ忘らるゝ花にそ有ける

○いな、然やうにては待らず。これは植て見る私は不忘して、あだなる君に先づ忘れらるゝ花にて待るよ。
さるゆゑに、文をはつけてまゐらせたるなりといふなり。

平定文がもとより、なにはのかたへなんまかると、いひおくりて待ければ こせ 又ノ一本 (二十六才)

○なにはは、神武紀に、戊午年春三月、丁酉朔丁未、ミイカサツビニミヤコツラスチヒムカシノタニ イヂマスキニ 皇師遂東舳舻相、エハノサキエイワシメ ヲシモミカシホオコリタイタハヤカキ カレンコナニハノクニトツケタマヒキ マサニハヤキイフ イマナニハトイフハヨコナレルナリ 接方、エハノサキエイワシメ ヲシモミカシホオコリタイタハヤカキ 到難波之碇。曾有奔潮太急。因以名為浪速國。亦浪華。今謂難波訛。
とあり、さて難波は、古へは難波國ともいひて、摂津ノ國、西生ノ郡、又東生郡の西ノ辺までかけての大名にて、古書どもに見えたる事など、古事記傳卷十八に、委く見えたるが如し。

土佐

吾

浦わかず見るめかるてふ海人の身はなにか難波の方へし と異 ゆく

○いづこの浦にても、海松和布をは刈るといふ海人の、何ゆゑ、ことさらにとりわけて、難波の方へは行くことぞ、といひて、誰にても、人をはわかずに逢見給ふといふ、あだくしき君の、何ゆゑにとりわきて 二六六、遠きあたりまで行給ふ事ぞといふなり。しもと云詞は、ことさらにとりわきて物する意なり。俗言に釈していはゞ、サマアといふに近し。集中にも多く見えたる詞なれば、ことに例などはあげず。よく考へわたして心得べし。

返し

貞又ノ一本
定文

五五

君を思ふ深さくらべに津の国のほりえ見にゆく我にやはあらぬ

○君を思ふ心の深さをくらべて見んとて、難波堀江の方にゆく我にはあらずや、といひて、さやうにはし
らるべきを、浦わかず云々、何か難波の方へしもなどいはるゝは、いかなる事ぞ、といふ意をふくめたる
なり。此贈答なども、戯の意もあるさまなり。是則集、「わたの原かづきてしらん人しれず思ふ心のふか
さくらべに、拾遺恋四、「津三十七の国の堀江のふかく思へとも我はなにはの何とたに見ず。堀江は、書
紀、大鶴鶴尊御卷に、十一年、冬十月、堀三宮北之郊原、引三南水一以入三西海一。因以号三其水一曰三堀江一
とあり。古事記傳卷三十五、十六また、久老神主の、難波旧地考に委しく見えたり。

つらくなりにける人に、つかはしける

いせ

五五

いかでかく心うきもひとつをふたしへに心ひとつをつらくも六帖なして見すらむ

○縣居翁は、さきにねもごろなりしと、今つらきと、二つなり。うくつらきはひとつの意のみ、といはれ
たれど、今思ふに、然にはあらざるべし。今思ふに、うくもは、俗言に、浮気ウツキラシクモといふに近く、男
の心の、あだくしき故に、此方の心に、疑ウタガがはしく危アヤく思はるゝ意なり。つら三十七くもは、此方
へあたりのつれなきさまにて、此方の心に、恨めしく思はるゝさまなる意なり。ふたしへには、二方フタヘにな
れども、此歌に遣ひたる意は、いろくにといはんが如し。君が心一つを、いかなればさやうに、浮気ウツキら
しくして、此方に物思ひをさせたり、又はつれなきさまにあたりて、恨めしく思はせたり、いろくにな

して見せ給ふ事ぞ、といふに近し。心一つをと云て、フツシベ二方にといふが、此歌の趣意なり。うくものうの詞は、アブナキ浮危意なり。うき世などのうきも、世のさまの、アブナキ浮危して心に憂く思はる、意なり。つらきは、我身にあたるさまの、つれなくツレ氣強キに思はる、やうの意なり。かくて正明は、此歌うくもつらくもは、必反対の詞ならては叶はぬ所なり。一首のあしきなるへし。しはらく真淵の説の如くなるべし。うくを浮気といふ事ニ二十八ハは例もなくことわりもなし。たとへうはきと見ても反対にならねばよくは叶はずといへり。此説もさる事にて、もとより此歌よくも心得かたきさまにてはあるなり。此説々の中にてとる人の心に任すべし。さてうくを浮気らしといへるは、実にいさ、か異やうなる解きさまには聞ゆべけれど、猶思ひよりたる事もありてかくはいへるなり、委き事は別記のうたがたの条にいへり。

題しらず

よみ人しらず

五七

ともすれば玉にくらべします鏡人のたからと見るぞかなしき

○抄に為家卿抄云、玉をはめでたき物にいへば、ほむる事にいふなり。女を鏡にそへてよめる歌なり。奥義抄云、人のたからとは、女のこと人につきければ、よめるにやと見えて、契沖法師も男の歌なりといニ十八ハはれたり。一首の意は、我かめでたしと思ひ居つる女鏡の事なれば、ともすればチヨットモスレバ、世上にめてたき物にもてはやす玉にも、比て明くれめでよるこびしものを、我を離て人の手にうつりたれば、今は他人の宝と、見る事の悲しさよといふなるべし。人の宝と、いふ詞、二ノ句にかけ合へり。玉は世上の宝とする物なればはなされと、正明は二三ノ句古事あるべきが如し。た、鏡をほめたる事とも聞えずといへり。此説によらは、かの神代紀の、天の石イハ窟ハの条に、神の枝に玉と鏡とを懸たる事なとより、思ひよせて、此故事によると玉にく

らべします鏡とは、いへるにてもあるべし。

要

しのびたる人に遣しける

いはせ山谷の下水うちしのび人の見ぬまはな六帖かれてぞふる (二十九オ)

○水沼を不見間にそへて、いと忍て恋ふれば、人の見ぬ間は泣かれてのみ、月日を経る事よとなり。流に所泣ナカレをかけたたるは論なし。所泣といへるは、自然と涕泣ナカレる、意なり。泣くといふとは異コトにて、此詞にてあはれ深きなり。此類の詞遣ひは常に多くあり。なぞらへてさとるべし。正明は、人の見ぬとは、思ふ人の我を見ぬ事か。人のの文字六帖の如くもにてもいかなり。必我か人を見ぬ事にて有べきが如し。もしのはをの写誤にはあらざるかといへり。此説もさる事にはあれども、猶人の見ぬ間とは、思ふ人の事にはあらで、たゞ他人の我を見ざるをいふなるべし。もとより忍ふる事なれば、他人の目をはしひてつ、めども、心には絶ざる故に、人目の間あればといふなるべく思はる。新勅撰伊勢恋三、「あひ見てもつ、む思ひの悲しきは人ニ千九〇間にのみぞねはなかれける、とあるなども引合せてさとるべし。磐瀬山は、大和国高市郡と契沖法師いはれたり。新勅撰又、「神なひのいはせの杜の郭公ならしの岡にいつか来なかん、とあるいはせのもりと同所なるべし。

ひとをあひしりてのち、ひさしうせうそこもつかはさざりければ

※つかね緒云、あひか(ママ)かたらひ侍け
る人の、後に久しうせうそこもせざりければ

五五

うれしげに君がたのめし言の葉はかたみにくめる水にぞありける

○先達^{ハヤタケ}て君が我をうれしかるべきさまに、頼ましめ給ひし御詞は、籠^カに汲^クたる水にて侍しよな。今は跡かたもなくなりたればといふなり。伊勢物語、「いかでかくあふごかたみになりぬらん水もらさじと契しものを、とあるは、逢期難くといふにかけたるなり。今本集のは三^三才、只なごりもなく成たりと云意のみにて、別にかけたる意はなし。若は記念^{カキミ}に云かけたるにやとも思へと、猶さにてはあらざるべし。かたみは、和名抄には、笈^{賢太美}符^{誦語抄}云小籠也と見え、神代紀、また万葉には、籠の一字をカタマとよめり。カタマは即カタミなり。

題しらず

五六

行やらぬ夢ちにまどふ^よたもとは天津そらなき露^るぞおき^{やおくらん}ける又ノ一本

○抄云僻按抄云、夢の中なれば、天津空なき露やおくとよめり。愚按一条禅閣、愚見抄云、露は空より降物なるに、夢路におく露なれば、天津空なき露となり云々、泪の心なり。抄以上為家卿正義に、「行やらぬ云々天津空なる露やおくらん。右題不知。師説云、夢中の泪なれば、天津空なき露やおくらんとよめり、とありて、縣居翁の書入に、後撰には、天津三^三空なき露ぞおきけるとあり、と見えたり。か、れは、末句は、古くより二方に伝へたるなるべし。かくて一首の意少ししかにも心得がたき歌にて、又さしも深き意ありげもなし。僻按抄愚見抄などの御説にて足りぬべし。猶古今^二に、「夢路にも露やおくらん夜もすがらかよへる袖のひちてかはかぬ、とあるなどの少し異なるにて、同^三に、「うつ、にはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るがわびしさ、などの如く、夢にておもふ人の許へ行んとするに、それも思ふやうに

五二

も行がたくて、わびつ、明したる暁の袂に涙のかゝりたるを、ゆきやらぬ夢路に迷ふミタといへるなるべし。四ノ句の意は貫之集に、「人を思ふ心のそらにある時は我衣手ぞつゆけかりける、下若菜卷、「おきてゆくそらもしられぬあけぐれにいつくの露の三十一まかゝる袖なり、続古今其傳、女御述子かくれて後の春、花を見て、「見るからに袂ぞぬる、桜花そらより外の露やおくらん、などある類なるべし。

身ははやくならの都にとなりにしを恋しき事ふりせざるらん 拾遺のまどもふりぬか

○我身はとくに故京の如く古くなりたるものを、人を恋しく思ふ心は、いまだ古くならずして、もとの如くに恋しき事かなとなり。末句ふりぬるとある本は、誤なり。か加とあるに従ふべし。か加はかなの意なる事、まだものも文字よりかゝりたるにても知るべし。但し、拾遺四に出たる方は、今少しまさりざまに聞ゆるなり。こは、人にふるされたる人の歌ならんか。奈良都は、大和ノ国にて、元明天皇の和銅三年に遷都ありて、其後、恭仁(クニ)ノ宮、難波ノ宮、保良ノ宮などにうつされたる御代もあれども、桓武天皇の初メまで、同じく此平城ノ宮に、そは皆しはらくづ、の事にて(三十一)ウ、むねとは此奈良に大ましぐたるなり。桓武天皇の初メまで、同じく此平城ノ宮に大ましぐ、同天皇の延暦三年長岡に遷都、十三年に、今の山城國都に、遷されたるより、奈良は旧都となれり。よりて今の京にては、旧たアる事には、奈良の都といふ事、常の詞となれるなり。

五三

住よしのきしのしら浪そりよるくは海人のよそめに見るぞわびかな又ノ一本しき

○抄に、序歌なり。夜々は逢もせで、よそめにばかり見るが悲しき、となりとあるが如し。我が思ふ人にあるものを、さるけしき見する事もならずして、たゞよそ外のかげ離たる人のさまに、見なすことの悲しき事よとなり。上二句はた、よるくはといはん料の序のみなり。かくて住吉の岸は、波の間ヒマなくたつ

所なれば、波をよみたる歌多きよし契沖法師いはれたり。但こは此歌の意にあづかる事にはあらざり。よそ目に見るとは、れども、事の序にいふな三十三より。かけ離たる、我にうとき人のさまに見なす事なり。

五三

君こふとぬれにし袖のかわかぬは思ひのほかにあればなりけり

○君を恋ふとて、濡たる袖の不乾カラカザルは、思ひといふ火はあれども、それは君の許にのみ行て、我身には添はずに、外にある故なるよな、といふなるべく思へども、又よく思ふに、下ノ句は、君の思ひは、我方ならぬ、他の所ほかにのみあればなるよ、といふ方なるべくおほゆ。

五四

あはざりし時いかなりし物とてかたゝ今の間も見ねば恋しき

○不逢スミし間は、いかにしてありつる事にか、一度逢ひて後は、たゞしばしの間だにも、見ずに居れば、恋しくて堪へがたき事よとなり。思ふに、こは女に初て逢たる、後朝の歌にもあるべし。夕顔巻夕顔上ノ君の許、氏君のおはし、まじ初たる所に、あやしきまで、けさのほどひるまのへだても、おほつかなくなど、思ひわづらはれ給へば云々、又、葵巻源氏ノ君、紫上君に、あひ給ひての後の所に、年ごろあはれと思ひ聞えつるは、かたはしにもあらざりけり。人の心こそうたであるものはあれ、今は、一夜をも隔ん事の、わりなかるべきこと、おほざる云々、とあるなどによく似たり。

五五

世中にしのぶる恋のわびしきはあひての後のあはぬなりけり

○深く世を忍ぶ中なれば、一度逢て、その後さらにあひがたきは、いとわびしき事なるよとなり。

五六 恋をのみつねにするがの山なればふじのねセ又一本にのみなかぬ日はなし

○初二ノ句は、我が思ふ人を、常々絶間もなく恋ふる意なり。恋を為るといふを、駿河へいひかけて、さて富士の嶺ホを、音にいひかけたるなり。三十三ま 新古今恋二深 煙たつ思ひならねど人しれずわびてはふじのねをのみぞなく。

五七

君により我身ぞつらき玉だれの見ずはつらし思はましやは素性集

○逢見ずは、かく恋しさのやる方なき事もあらじを、あひ見しゆゑにかく恋しく、思ひわぶる事よと思へば、君によりて、今は我と我身のつらくなりたりとなり。玉だれは、冠辞考に、万葉卷二に、玉垂乃、越乃大野之、云々。さて、玉は、緒を貫て物に掛垂て、飭にする物なれば、玉だれの緒といひかけたるなり、云々。卷七に、月ホ、玉垂、小簾之間通。卷十一に、玉垂、小簾之寸雞吉尔、入通来根、云々。これも右にいへる如く、緒といひかけたり。後撰に、玉垂の見ずは恋しと、よめるは、後人例の転々せしつゞけなり、と見えたるが如く、万葉には、玉だれの緒と受三十三て、小簾といへるを、後世は、小簾をコスと訓みて、鈎簾など、書て、玉だれを、玉簾などの意に歌によむ事となれり。此歌も、御簾に玉だれと云詞を冠らせたるは、これらの次第の意なるべし。かくて、御簾に云かけて、意は不見の詞に用ひたるなり。「和泉川いつ見きとてかなどの如く、清濁にか、はらずいひかくるは常なり。

をとこの、はじめて女の許にまかりて、あしたに、雨のふるにかへりてつかはしける

○初の、男のといふ事は除くべきよし、つかね緒に見えたり。

五八

いまでもしるあかぬわかれの暁は君をこひぢにぬる、ものとは

※正明云、此男のと云文字は除かたし。もし是を除かば、よみ人不知とあるべし。是は作者なり。詞書のみ。此集にかぎりたる事多くて、是も其一つなり。

○不厭別の恋しさに、涙の雨にて、道も泥ドロになりて、其泥にぬる、物ぞと云事は、今身にとりて知たるよとなり。古今三恋、「明ぬとてかへる道三十四」にはこきたれて雨も涙もふりそほぢつ、とあるに大かた似たり。恋路を泥コヒチに云かけたるなり。そは、葵巻、「袖ぬる、こひぢとかつはしりながらおりたつたこのみづからぞうき、かへし、「あさみにや人はおりたつ我方は身もそほづまで深きこひぢを、などの類なり。こひぢは、和名抄、地部に、泥、孫儒云、土和水也。和名、比知利古。一云、古比千。とありて、土と水と和れるなり。俗言に杼呂ドロといふ物なり。さて濡る、事をひづちひぢなど云は、泥に漬ヅクてぬる、を本にて、雨露泪などにぬる、にもいへり。ひぢつはやかて、溼漬エツクの意、ひぢはひづちの約りたる言なるよし、万葉考二巻別記に委し。かくてこひぢのこの言は、濃コの意ならんか。粉コの義ならんか。猶考ふべきなり。

かへし(三十四)

五九

よそにふる雨とこそきけおほつかな何をか人のこひぢといふらむ

○抄に、我をこひぢにぬる、にはあらし、よその人ゆゑならんとの心なるべし、とあるが如くなるべし。又思ふに、よそに降る雨とは、我方へはよりつかず、外々へばかり行給ふ君ぞ、といふ下心をふくめて、今の別の道の雨は、道の悪くなるほどの雨にはあらず、遠方にて降る雨にて、道のさまざまをなす雨にはあらし。深泥コヒチのかこちごとは、あたらぬ事に侍り、など云意にもあらんか。

つらかりける男く侍 又ノ一本

吾

たえはつる物とは見つゝ、さゝがにのいとをたのめるこゝろほそさよ

○いとつらき御心なれば今は絶果給へるぞとは見ながら、かの蛛の糸の衣にかゝれば、もし又とはる、事もやと、さすがに頼むは、心細三十五まき事に侍るよ、となり。初句と末句は、糸の縁なるはさらなり。

古今悉五「今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝり我をたのむる。蜘蛛クモの糸の、衣にかゝる時は、必

思ふ人よき人などの来る、前祥なりといふ事は、今世にもいひ、漢籍、爾雅の釋蟲、また、西京雜記等に也も見え、私書にも同じきまた、上古の諺にもいへる事なり。よりにて、紀の允恭の御卷に、衣通姫の、「和ワ敵ガ勢セ故コ我ガ句ク倍ベ積キ豫ヨ臂ヘ奈ネ利リ、佐サ佐サ餓ガ泥ニ能ネ、區ク茂モ能ネ於ノ虚コ奈ネ比ヒ、虚コ豫ヨ比ヒ辞シ流リ辞シ毛モ、とよませ給へるを初にて後後も

多くよめり。但し、允恭天皇の頃より見えたるほどの事なれば皇御園にて上代よりいへる話なり。彼漢籍私書等に見えたるは、たまく合へるものな似く似たる事もありと、其道学ふ人どもいへり。これらを以ても、神代の事の、漢籍私書などに、たまく今思ふに、古く紀記万三十五ウ葉

などには、皆さゝがにのくもとのみよみて、たゞにさゝがにとのみよめるは見えず。然れば、もしは蛛の枕詞なるを、例の、枕詞をやがて其物の事にいふしきたへのふさず、も、しと同じ定にて、古今集の時代よりの事

にはあらしか。蛛をさゝがにと云説は、日本紀私紀に、蜘蛛之別名也とあるは、こともなきいひ方にて、契沖法師は、物の小さきを、さゝがかなりともいへば、小さき蟹カニに似たりといふ心にて名付たるかといは

れ、縣居翁は、蜘蛛は蟹の形したれば、是は水ならで、篠サにすむ蟹の心にていへる、蛛の一名なりといはれ

返し

うちわたしながき心はやつ橋のくもでもにおもふ事はたえせじ

※ 正明は、うちわたしとは、かりそめにかけたる意、二ノ句は、いつまでもかはらぬ意、四ノ句の思ふは、物思ひにはあらず、女を思ふ事なり。くもでもに思ふといへるは、一寸ちならず心のうつる事なり。此思ふは、俗言にホレタと云意にて、気ニモホレタガ、安ニモホレタ、年恰好モヨイガ、背タケモヨイ。手モヨウカク、琴モヨウヒク、と云やうに何くれ
 の事に心のうつりて思し急なるべしといへり。

○ 絶果る物と云々、糸をたのめる云々などいはるれども、此方の心を 三十六卷 は、君に打入れ^{トホ}亘して、長く恋る事なれば、それにつきては、色々さまざまと、思ふ事も多くあるなり。かやうに君を思ひ^{トホ}亘して居る心は、いつまでも、決して絶はせじといふなるべし。又一説は、君に心を打入れ^{トホ}亘して、長く恋る事は、絶るなどいふ事はさらに無き事なり。さてかやうにいつまでも変らじと思ひて、月日を経る間には、わびしくも憂^ウくも、いろく^クに思ふ事も出来るなれど、此いろく^クさまざまの物思ひは、いつまでも絶る事はあらず、といふ意にて、さて、末句の絶せじとあるは、^{ミツカ}自の物思ひの絶ざる事なるを、詞の上にては、かけ歌の初句にあたりて、いな、^否絶はせじとひ^ヒかせたるなるべし。されど、是はたゞ詞の上のみのひゞきにて、意は四ノ句の意詞^{思ふと云}を受けて、いへるなるべし。此意と見る時は、かけ歌の絶はつる云々といふに 三十六卷 ことたへて、打わたし長き心はといひたる、心はのてにをはは、心なればといふ意にて、これまでもにて、答へたる意は^答済で、さて蜘蛛手に思ふといふより以下は、我心に種々思ひの絶せぬよしに転していへるものなり。^{もとより深く思ひかはして、年月を経る間には、思ふ事も多くあるは、論もなき事なれば、かくもいふべき事なり。}

かけ歌に、絶果るとあるにあたりて、絶せじといひ、さ、がにのとあるをうけて、蜘蛛手といへるは、皆かけ歌の詞を、此方にては、詞の上のみにうけて、^{其詞に答へた意は、我心に思ふ事をいへるのみならんか}といふ説なり。これ又、古への贈答に、ま、ある事なり。やつ橋のくもでもといへるは、伊勢物語^段に、三河国やつはしといふ所にいたりぬ。そこをやつはしといひけるは、水ゆく川のくもでなれば、橋をやつ

五三

思ふ人おもはぬ人のおもふ人思はざらんおもひしるべく

思ふ人侍ける女に、物のたうびいひけれちれなく侍けれは一本けれど、つれなかりければつかはしける

○物のたうびは、のたまひを音便にいへるにて、意は物いひけれど、いふに同じ。又の一本には、思ふ人ある女に、物いひけれど、つれなく侍ければ、とあり。

○是はむつかしき歌にはあらねど、同じ詞多ければ、混まらはしくして、ふとは聞わきがたし。よりて今、甲乙丙のしるしを以ていふべし。まづ詞書は、思ふ人丙他侍ける女乙に、云々遣しける、よみ主甲、と心得べし。思ふ人侍けるとは、女のはやくより思ひて、居る男なり。女を思ふと云意にはあらず。歌は、「思ふ甲我三十八才を、思はぬ乙君が、思ふ丙りの男の、乙君を思はざらん。今より乙を思はぬやう思はれぬは苦しき物となり。古今傳「我を思ふ人を思はぬむくひ

わたせるによりてなん、やつ橋といひける、とあるをもと三十七才にていへり。かくてやつ橋のは、くもでにといはん料なり。打わたしは、橋の縁に云て、即其橋を見わたす意のいひなしなり。橋の長きを見渡したるよしなり。長きといふ詞は、橋に付たる言にて、此打渡しに付たる言にはあらぬよし、万葉四に、「打渡竹田之原云々、古今旋頭に、「打わたす彼方人云々、とあるなど、皆向を見渡す事にて、拾遺集歌、「舟岡の野中にたてる女郎花わたさぬ人はあらじとぞ思ふ、とあるも、舟の縁に云て、見渡さぬ人はあらじといへるなりなど、此「打渡し長き心は云々、また他の歌をもあげて、中昔までも、皆見渡す事にいへり。近き世となりて、知れる人なく、皆ひが心得して遠き事長き事ぞといへり。右に、など、鈴屋大人古事記傳、三十一いはれたり。これに引る歌どもの中に、遠く長き事にしては、聞えぬがあるを以て、其誤なる事を知べし。など、委くいはれたり。これによりて思ふに、此歌なるも、詞の上は見渡す意にて、恋の方三十七才にては、心を打入れトホ巨トホ経トホす意と聞ゆるなり。

にや我が思ふ人の我を思はぬ、と云は此よみ主甲の、好ヨキの如くになりたる時に、乙女がよみたらんやうの意なり。こゝに引合せて見るに、いとよくかなへり。また、玉葉ヨシキ恋三、又三に、「思へどもあひも思はず思ふ時おもふ人をや思はざりけん、とあるなどをも思ひ合はずべし。

かへし

五七三

こがらしのもりの下草風はやみ人のなげきはおひそひこりにけり又ノ一本

○木枯森とは、風の吹く杜の事として、男にたとへ、下草は、女の我身になぞらへて、さて風早みとは、男の心の変わりやすきよしなり。人のな三十八げきとは、女の我がなげきにて、おひそふとは、なげきを我身に負ひ添ふる事なり。男の心の早く変わる故に、我身の歎は負ひ添ひまざるといふなり。なげきを、木にいひなしたるなり。かけ歌とは、大にことざまによめる返歌なりと、師翁いはれたり。か、れば、木枯の杜の風があらさに、下草は、しをれふしてのみ居る事といふ意を、上ノ句にいひて、下ノ句は、其たとへいひたる実事の上をいへるなるべし。なげきを負ふとは、薪などを負ふによせていへるにて、木の生まる意にか、はる事にはあらず。木枯杜は、駿河国なり。新後拾遺三、「人しれぬ思ひするが国にこそ身まをこがらしの杜は有けれ。

男の、こと女むかふるを見て、へ侍るを一本おやの家にまかりかへるとて

○此詞書は、終ハナに、女といふ事を加かふべきよし、つかね緒に見え三十九たり。

五七四

別をはかなしき物と聞しかどうしろやすくもおもほゆるかな

五五

○別といふものは、悲しき物ぞとかねては聞居たれど、今かくわかれわかれになる心になりて見れば、何の心にかゝる事もなく、いと心やすき事かなといふなり。是は彼男をふつに思ひ切たるさまにいへるなり。かくいふ中に、かへりてあはれはこもりて聞ゆるなり。されと又、正明瓶麻呂などは、今までは平生ツツキにうしろめたくおもひつれと、かく他女をむかへ給へば、今よりは其人女の、男をはよくいたはるへければ、我はうしろやすし、といふ意ならんといへり。うしろやすくは、うしろめなき俗に安んじの反対にて、安んじに近し。元集に、さねすけの朝臣、子うませて侍ける七夜に、「日の本をうしろやすくぞ三十九おもひぬる国のちぶさにたのもしきかな、下頁、「万代の霜にもかれぬ菊の花うしろやすくもかさしつるかな。

題しらず

なきたむる袂な一本こほれるけさ見れば心とけても君を思はず

○逢て寝たる夜に、人の心のとけざる事は、かねて知居て流したる涙なれども、其涙のか、りし袖を見て、初て驚たるさまによめるにて、一首の意は、かく涙の多く出て、袂に氷つきたるを今朝見れば、夜べは、君の心もとけたりとは思はざりしよ、といふならんか。なきたむるは、泣泣々して、涙を袖に溜タ溜たる意と聞ゆるなり。四ノ句は、心とけたりとも、といはんが如くなるべし。新古今一「冬の夜のなみだに氷る我袖の心とけずも見ゆる君かな、とあるなどや、似たるさま(四十)なり。又思ふに、けさ見ればとあれば、後朝の歌にて、夜べ君にて初あひ見えて、ゆるらかに逢ひつれど、今朝物悲しくて、袖を見れば、袖が濡て有て、今朝のさむさに氷付であるなり。まことに、此氷にて思て見れば、是は君の心が、十分に打つけたるにてもあらずして、何とかや、今少し不足アカ所ありて、うれしきのみにもなかりしやうに思はる、

と云にて、うれしければ、又それにつきて、猶不足を思ふが、人の心のならひなれば、其不足を思ふ情を、かくよめるにもあらんか。此説に見る時は、初句は、た、なみだを袖にうけて、持ち留むる意と見る事なり。又正明は、人の心の打とけぬを、平生思ふなれと、夜さりねたる間にも然やうに思ふと見えて、涙か袖に氷しよといふ意にて、恋てねたるにもあらず。後朝の歌にてもあらざるべしといへり。(四十)

五七

身をわけてあらまほしくぞおもほゆる人はくるしといひけるものを

○此歌、抄には、両方を思ふ心なり。為家抄思ふ人二人に通ふを、人は苦しといふを、我は身をわけて、両方にはまほしきとなりとあり。又思ふに、夜べあひ見つる人が別る、事は、甚苦しき事と、大に別を、しみてくるしがりしさまにてありしなり。我身は今朝帰らねはならぬ事ゆゑに、帰りはしつれとも、此方へ帰て思ひて見れば、別を苦しといひし人は、其心のほどの甚あはれに思はる、を、我身を二つに分らる、物ならば、此方へ帰る身と思ふ人の側へとゞめおく身と、二つあらまほしき事ぞといふにもあらんか。正明は抄の説は穩ならぬさまなりといへり。

五七

雲井にて人を恋しと思ふかな我はあしべのたづならなくに(四十一)

○雲井にてとは、遠く離居てといふ意なり。そは居所の遠く隔たるのみをいふにはあらず。或は世間につ、みて途難き中、思ふやうに馴むつびがたきなどをいへり。古今三恋、「あしたづの沢べに年は経ぬれども心は雲のうへにのみこそ、下四恋、「いはねども我かぎりなき心をは雲井に遠き人もしらん、又五恋、「ちはやぶる神にもあらぬ我中の雲ゐはるかになりも行かな、紅葉賀卷、「尽もせぬ心のやみに迷ふかな雲ゐに

人を見るにつけても、新勅撰恋、「ながめつ、月にたのむるあふ事をくもゐにてのみ過ぬべきかな、新千載恋、「春雨の世にふる空もおもほえず雲ながらに人恋る身は、などあるを見合せてさどるべし。

人につかはしける

源ひとしの朝臣 (四十二)

五七

あさぢふのをの、しの原しのぶれとあまりてなどか人の恋しき

○二ノ句までは、忍ぶといはん料の序なり。古今恋、「あさぢふのをの、篠原しのぶともひとしるらめやいふ人なしに、などと同じく、初二ノ句は、たゞしのぶといはん料のみにいへるなり。一首の意は、此やうには思はじと、忍びこらゆれとも、堪へ忍ぶにもあまりて、恋しき事よ、いかでかくまでには、恋しき事ならんと云て、我が心の中をおしはかり給へかしといふなり。あさぢふは、浅茅生にて、茅の穂は、俗にツバナといふ物なり。ツバナは、即ち茅(芝)花なり。

兼盛 兼覧大君 又一本

五七

雨やまぬ軒の玉水かずしらず恋しきことのまさるころかな

○初二ノ句は数しらずといはん序に、其をりのさまを以ていはれたる (四十二) なるべし。末句に、まさる頃かなとあるにて、然聞ゆるなり。五月雨のころなどにもあるべし。軒の玉水は、軒より落る露アツダリの事なり。数しらず云々とは、恋しく思ふ事の、数限もしられぬよしなり。兼盛集、「君を思ふ数にしとらばをやみなくふりそふ雨のあしは物かは、ともあり。

心みじかきやうに、聞ゆる人なりといひ。侍り一本 ければ

○此詞書、つかね緒に、心みじかきやうにこそ聞ゆれと、女のいひければ」となほされて、此詞書のさま、あやしくて心得にくし。聞ゆとは、いふことをきくに、心みじかき人のやうにきこゆるといへるにや、又は心みじかき人のやうに、世中にていふ人なりといふ意か、いづれにしても、人なりといふ詞い(四十二)かゞなり。さだかならねどころみななほさば、右の如くあるべしと見えたり。今思ふに、詞書の意は、俗言にいは、御前は早く氣の変わる人ぢやと云やうな、うはさのある御方ぢやと、いひけと云意なるべし。早く心のかはる事を、短き心といひ、長く心変らじといふ事を、みじかき心は遣はずなどいふ事は、源氏物語などにも多く見えたればなり。かくて此歌は、決て男の歌と聞ゆれば、つかね緒に、女のといふ事を加へられたるは、然るべきなり。

よみ人不知一本ニナシ

五〇 いせのうみにはへてもあまるたく繩の長き心は我ぞまされる

○早く氣の変わる人ぞと云うはさがあるとのたまへども、此方は、いつ(四十三)までも長く久しく変わる心はなし。世中に長き物のたとへに云う、たく繩の中にも、通例のたく繩にてはなく、其広き伊勢の海に引廻らし、延ても余るほど長きたく繩より、猶長き心は我ぞまさらんと云なり。心短きといはれたる答へなれば、殊の外に長く類もなき程の物を取出ていへるなり。抄には、序ながら長き心は、かの桕繩より我ぞまさらんとくらぶる心あり、とあれども、こは桕繩にくらぶるにはあらず。然のたまふ君よりは我ぞまさらんといふなり。古今「いせの海にあまのたく繩うちはへてくるしとのみや思ひわたらん。たく繩は、万葉に桕繩と書り。たくはたへとも云て、楮といふ木なり。今はかうぞと呼て紙にすく物なり。いにしへ

は其木の皮にて布を織、且繩などにもせしなり。網アミなどの繩には今も用ふとなり。(四十三) 即其繩をたく繩といへりと、懸居翁のいはれたるがごとし。

人につかはしける

五二

いろに出て恋すてふ名ぞたちぬべきなみだにそむる袖のこければ

○涙に染るとは、例の紅涙なり。紅涙に染る袖の濃コければ、色に出て云々となり。

五三

かくこふるものとしりせばよひによるはおきてあくれば消るあしたはけぬるつゆならましを万葉

○此歌万葉十二に出たり。夜はおきては、たゞ露のうへをいへるなり。我身の事にはあづからず。かく恋つ、あらんよりは、露にてあるべきものといふのみなり。

五三

あひも見ずなげきもそめず有し時思ふ事こそ身になかりしか

○いまだ逢見初めせず、歎なげきをもしらで有つる時分トキはと云事なり。二ノ句(四十四)はあひ初めて後は、思ふやうにしばく逢ふ事の難きをもなげき、又人の心の浅きさまなるを恨などする意なり。たとひ実心浅きにはあらでも、此方の心ま、ならぬは、人の心浅きからの事のやうに思ひなされなどして、かにかくに物思ひの絶さるは、恋の上の常の情なり。いまだ逢見初めざる以前は、さる物思ひは此身になかりしものを、といふなり。上下ノ句の間には文字を加へて心得べし。風雅恋四「恋しさも人のつらさもしらざりしむかしながらの我身ともがなニハナリ、かゝりてしがと結べるは、昔云々なりしものといふ意なり。此類の文字を濁てとなふるは誤なり。委くは玉箱五の巻七葉を見て心得べし。

五八四

恋のごとわりなき物はなかりけりかつむつれつ、かつぞ恋しき見る人のかつは恋しき 六帖

○恋のごとは、恋の如くなり。わりなきは、無理コトワリナキといふにいと近く、俗(四十四)に無理ナといはんか如し。むつれは、むつまじみしたしむ事なり。帯木卷詞に、心に思ふ事をもかくしあへずなんむつれ聞えたまひける、櫛卷詞に、うれしとおぼしてむつれ聞え給ふ、未通女卷歌「鶯のさへづる声はむかしにてむつれし花のかけそかはれる、などもあり。一首の意は古今恋四に、「心をぞわりなきものと思ひぬる見るものからや恋しかるべき、とあるに大かた同じく、今かく相添て居ながら、猶片方には恋しく思はる、事かな、此上にはすべきやうもなきものを、恋の情の如くにあながちに無理物ワケモノは、なきものなるよといふなり。かつの辞は、相添てむつび居るに、猶片方には恋しき心のまじる意なり。

女のもとにつかはしける(四十五才)

五八五

わたつうみに深き心のなかりせばなにかは君をうらみしもせんかほらすは 人 伊勢集

○初句わたつみのなれば、海の如くと云意にて、ことによく聞えたり。又になれば、我深く思ふ心をわたつみといひなしたるなるべし。我が深く思ふ心のなくは、いかで君の深く思ひ給はぬをも恨ん。我が深く思ふゆゑにこそ、君をもうらむれとなり。浦見

五八六

みなかみにいのるかひなく涙川うきても人をよそに見るかな神異

○神に祈るかひもなく、おちつかで人をよそにのみ見る事かなと云を、水上、涙川、うきて、などにて為立たるなり。落つかでとは、此恋のかなふか、かなはざるか、しられねばなるべし。古今恋、「朝なく

たつ川霧の空にのみうきて思ひのあるよなりけり、なども、落つかず定(四十五)まらぬ意なり。涙川の縁に、みなかみとはいへれど、意は神の方のみにて、水上の方にあづかるにはあらず。かくて此歌は、女を見てよみかけたるなるべし。返歌の、けふより外に云々とあるなども、しか聞ゆるなり。

かへし

五七

いのりけるみなかみさへぞうらめしきけふより外にかげの見えねば

○さほどに祈給はゞ、とくより逢見まゐらするやうになるべきを、今日より外に、影をたに見まゐらせぬは、其いのり給へる神さへうらめしく思はれ侍りとなり。かげの見ゆるといふも、川水のよせなり。みなかみを、神の意にいへるは、元輔集に、「みなかみにいのりかくとも今さらにたちかへらめやおきつしら浪、など猶あるべし。(四十六)

九条一本

右大臣

大輔につかはしける

五六

色ふかくそめしたもとのいとゞしく涙にさへもこさまさるかな

○色深く染しとは、深く逢馴たる事なるべし。涙にさへも云々は、例の紅涙なり。伊勢集、「こさまさる涙のいろもかひぞなき見すべき人のこの世ならねば

題しらす

よみ人も抄しらす一本同

五九

見る時はことごとく見ぬ時はことありがほに恋しきやなぞ

○逢見れば、さのみの、是ぞといふほどの事もなくて、立はなれて逢ずに居る時は、甚しき用もあるやうに恋しきは、いかなる事ぞとなり。まことに恋の上の情、さる事なり。ことぞともなくは、何の事も無く、いはんが如く、ことありがほには、事ありげにといふに近し。胡(四十六)蝶巻、「うちとけてねも見ぬものをわか草のことありかほにむすほほらん

男のこんと。て、ござりければ申ける夜までござりければ 又一本

丑六

山里のまきの板戸もさ、ざりきたのめし人を待しよひより

○古今恋四に、「君やこん我やゆかんのいさよひに槓の板戸もさ、ず寝にけり、信明集、「夏の夜もまきの板戸もいたづらにあけてくやくおもほゆるかな、とあるなどの類なり。万葉十一に、「おく山の槓の板戸の音はやみいもがあたりの霜の上に寝ぬ、とあるを引て、山里とあるは誤なるべしと、契沖法師はいはれたれど、槓の門かならんには、実に奥山などならでは、いかゞなれど、槓の板戸とあるは、即常のやり戸なとの事をもいふべければ、必山家などにも限るべからず。(四十七)

はじめたる 又一本て、女の許に遣しける

丑一

ゆく方もなくせかれたる山水のいはまほしくもおもほゆるかな

○岩間といひかけて、我思ふ事を、言はまほしく思ふ事かなとなり。上二句は、岩間ほしくといはん料の序ながら、我思ひのやらんかたなければ、と云意をかねたるなり。

女につかはしける

五三

人のうへのこと、しいへばしらぬかな君も恋するをりもこそあれ

○今君は、我につれなきが、人よみ主の、我の身の上の事といへば、思ひしらぬ事かな、君も恋をする時節もありて、其時に人のつれなくは、憂ウレかるべきものを、といふなり。もこそその詳は、多くは、末をおしはかりてあやぶむ意なれども、此歌などは、末をおしはかる意のみにて、あやぶむ意はなし。此格もまれにあるなり。拾遺「身にかへてあやなく花を、しむかないければ後一四十七の春もこそあれ、などの類なる事、玉緒、五の巻に委しく見えたり。

かへし

五三

つらからばおなじ心につらからんつれなき人をこひんともせず

○いな、否我はつれなき人を、しひて恋る心は待らず。もし我に人のつらくは、此方も同じ心につらくしてあらんと、思ひ侍るなり。さる故に、人の上の恋をも、思ひしり侍らずとなり。こは、恋の情の、實にはさしもか、はらで、人にいひまけじとて言葉の上にて、しひていへるさまなり。古今四恋「わすれなん我をうらむな郭公人のあきにはあはんどもせず、とあるなど、似たるいひざまなり。又正明は、我つらくは、同し心に我を思はでおはせよかしといふ意にもあらんか。いづれにしても情なき歌なりといへり。美石猶思ふに、心にはあはれ四十八を知てもしひてつれなしつくり、情なきさまにもてなしなどするも、恋の上の一ふしなればさる味ともあらんか。

女のもとにつかはしける又ノ一本

五三

人しれずおもふ心はおほしまのなるとはなしになげくころかな

○君にはしられずして、此方の身一つにて思ふ事は多けれども、其事の成就とはなしに、我のみ歎くころかなとなり。二三ノ句は思ふ心は多しといひかけたるなり。大島の鳴門を、抄には備前とあれども、万葉十五に、周防國、玖珂郡、麻里布浦行之時作歌八首、とあるつゞきに、過三大島鳴門、而経三再宿一之後、追作歌二首、「これやこの名におふ奈流門能うづしほに玉藻かるとふあまをとめども、とあるは、周防國大島郡の灘の事なれば、こは必周防國なるべし。猶此次に熊毛浦の歌あ(四十八ウ)る熊毛も、周防國の地名なり。

男のもとに遣はしける

※つかね緒云、源さねあきらがもとにつかはしける。

中務

五九五

はかなくておなじ心になりにしを思ふがごとはおもふらんやぞ

やは 信明集

○我ははかなき心ゆゑに、君の心をもはからずして君の心に從ひて、同じ心になりて君をは深く思ふなるが、我がかく思ふ如くに、君も我を思ひ給ふにやと云て、我が思ふ如くには、思ひ給はぬにやあらんと云事をふくめたるなり。末句のてにをは、疑の例にて、其下へ、その辞を加へて意をつよくしたるなり。やはにても同じ。やはは歎息の重きなり。此歌中務集にも、此集と同じくやそとありて、猶拾遺集などにも例あれば既にはあらねど、やはの方歌さまはまさされるが如し。玉緒四の巻をも見合せてささるべし。

かへし

源信明 (四十九才) 二ひ 一本

五九六

わびしさをおなじ心ときくからに我身をすて、君ぞかなしき

○恋の道のわびしさを、君も我と同じ心ぞと、聞くと其まゝに、まづ我身の上はさしおかれて、君の物思ひの多くわびしからんが、悲しき事よとなり。上若菜巻、源氏君の、須磨浦に、おはしたるを、なげきに、我身までの事はうちすておき、あたらしく悲しかりし有さまぞかし、云々。かけ歌に、同じ心になりにしを、とあるは、信明朝臣に従ひたる事なるを、此歌にては、自身のうへに、此恋の事によりてくさくわびしき事のある、それは、もと深く思ふよりの事なれば、やがて其事として、わびしさを同じ心と、云々とはいはれたりと聞ゆ。かくて、此贈答、中務集には、又人、「はかなくて云々、かへし、「わびしさを云々、とあり。さね明集には、はじめてのつとめて、かへりたる日、「はかなく、四十九て云々、返し、「わびしさを、云々とありて、此集とは、よみ人、かなたこなたのたがひあり。されど、今思ふに、「はかなくて云々の方、女の歌として、よく合ふさまなれば、此集の方やまさりたらん。

まからずなりにける女の、こと又一本人に名たちければ遣しけるるを聞て異

○此歌信明集には見えされとも、同じ朝臣の歌なるべきなり。

さだめなくあだにちりぬる花よりはも又一本ときは山一本松の色をやは見ぬ

○花のごとく、さだめなくあだなる男と名た、んよりは、何とて松の色のいつも変らぬが如き我を、長く逢見ぬ事ぞと云て、あだなる男なる故に、さやうに名も立たるはと云を、ふくめられたるなり。

かへし

よみ人しらす

住吉の我身なりせば年ふとも松より外のいろを見ましや(五十才)

五九

五七

○君に住よきと思はる、我身ならば、君松より外の色を見侍らんや。すみよしとも思はれぬうき身の悲しきには、本意にもあらず松君より外の色人をも見侍しぞとなり。身をなげく意初二ノ句に有り。

正明云、すむといふは、本妻にする事なり。初二ノ句は本妻にしてもよき女と思はる、我身なりせばと、いふ事なりといへり。かくて、住吉を居住善き意にいへるは、古今雜上、「すみよしと海人はつぐとも長るすな人わすれ草おふといふなり、拾遺雜上、「世中をすみよしとしも思はぬに何をまつとて我身経ぬらん、同雜下、「都には住わびはて、津国のすみよしときく里にこそゆけ、など猶あり。かく居住善き意にいへ、男女の間の通ひすむ事にもかけていふべきことなり。住吉の事は上卷下卷十七葉、通ひすむと云事は春上卷十葉に委くいへり。住吉は元來松の名高五十き所なれば、松より外のはいひよせたるなり。住吉の松をよめるは、古歌にいと多し。又の一本に住のえとあるにて見れば、此本の住吉をも、すみのえとよむべきにやとも思へど、猶然にはあらざるべし。

男につかはしける

五九

うつ、にもはかなき事のあやしきはねなくに夢と思ふなりけり一本の見ゆるなりけり

○いとほはなく、はつかに逢見し事を夢といへりと聞ゆ。現うつにても、はかなかりし事のあやしきは、寢ざるにたゞ夢見たりとのみ、思ふ事よといふなるべし。花宴卷詞に、あり明の君ははかなかりし夢をおほし出て物なげかしうながめ給ふ、とあるも朧月夜ノ君のさきの夜、源氏君にはのかに逢給ひたる事をさして、夢といへるとおなじ心ばへなるべし。(五十一才)

女のあはず侍けるにければ一本

六〇

しら浪のよるくきしに立なれよりてねも見しものをすみよしの松

○今まで夜なく行てもろともに、寝もしたるものを、いまさらにかでかく逢はずのみある事ぞといふを、住吉の浦の波の、しばく岸にたちよりて、松の根をも見たるものといふにて、したてたるなり。

をんなに一本
男につかはしける

六一

ながらへてあらぬまでも言の葉のふかきはいかにあはれなりけりける 抄又一本同

○此歌はいと心得がたき歌なり。抄には、行末ながらへては、かやうにあらずかはるまでも、深くたのむる詞は、いかにあはれに覚ゆるとなり。いかに、何ほどかとの心なりとあり。瓶麻呂は、此いかにの五十一詞は、常にいかに疑の意にいふとは異にて、物を承諾承諾て云一つの詞にて、俗言に、イカニモ然サカサ様なといふ意と聞ゆるなり。末句のあはれは、うれしきに感ずる意にて、男の許より長くかはらじなどうれしかるべき事を、いひやりたるをりなどの事なるべしといへり。此意と見る時は、一首の意は抄の説といと近し。但しながらへては、長経ナガラヘの意にて末長く経る事なり。又正明は、いかにを、げにもと云所に用ひたる例はおほつかなし。俗言にいかにもくと云には、も文字あり。いかにとのみにては承諾意にはなるべからず。此歌は心得かたき歌なり。試にいはず、いかにには不審なる義にて、ながらへてあらぬまでもとは、恋に命を失ふまでも及ぶなり。さやうに言の葉の深きはトウデアいかにラウゾ、実の事にてあらんか。あはれなる事は五十二あはれなるが、といふにてもあらんかといへり。此説によりて、又試にいはず、男の許より、死ぬべしなといひおこせたる返事にて、さやうに死ぬべしなど、存生ナカラヘておはさぬほどにマア、御言葉の深イノハ、ドウいかにデコザリマセウカと疑て、さてあはれには思はれ侍る事よといふにてもあらんか。

此末句、王緒になりけると直されたれども、是は、けりの方宜しきさまなりと師翁もいはれたり。

後撰和歌集卷第九新抄（五十二ウ）

付記 本巻の翻刻は山形香織さん（聖心女子大学大学院修士課程平成元年修了）の協力を得た。記して謝意を表します。

なお底本は二十二葉が落丁なので、静嘉堂文庫のマイクロフィルムにより補った。